

「食品を包装する」とは

① 食品と包装との出会い

(歴史と文化)

(1) パッケージ (包装) の原点

人類が地球上に現れて社会的な共同生活を営み、互いに交易するようになる、食物などを「入れるもの」や「保存するもの」、「運ぶもの」が必須となった。ここから木皮籠、藤籠、竹籠、つぼ、樽、びん、簀、筵すが生まれ、包装の原点になるものが誕生した。

紀元前4000年頃には中国の仰韶ぎやうしやう文化が開花し、写真1-1のような彩陶器が登場した。この

美しく彩色された陶器は、生活必需品と同時に美しさを感じさせる立派なパッケージである。この時代から包装は、単に機能を満足させるだけでなく、装飾的な審美眼をもって造られており、機能美と装飾美とが重なって情報を発信し、ひとを和ませ、またあるときは、ひとを驚かせながら差別化やファッション化を楽しんでいたと思われる。

さらに文化が進んで、1000年ほど前にわが国の東北地方で発明された「藁苞納豆」わらづと(写真1-2)は、世界に誇る最高傑作の食品包装である。

このように包装は、



写真1-1 仰韶文化の彩陶器
(BC4800 ~ 4300)



写真1-2 豆納苞づと藁

時代の流れとともに、生活の知恵として時代の最先端の情報や技術を取り入れて育まれ、その時代を代表する文化のパロメーターとなつている。

という意味に使われ、「包むことにより外界にある汚れから内界を守り、清いもの、聖なるものに保つ」という意味がある。このことから、「包む」ことが日常生活における保護・貯蔵・運搬という機能だけでなく、精神面・文化面でも深く生活のなかに根ざしていることが理解できる。

(2) 詰める文化と包む文化

「包装」は「包んで装う」といわれるように、わが国の伝統的文化が表れており、「包む」ことが文化として生活に深く浸透している。一方、欧米ではびん詰や缶詰のように「詰める」イメージが強い。

「つつみ」は、古代では「かくす」「さえぎる」

(3) 「包み」の歴史

奈良時代の「包み」は、天変地異を鎮めるため、ワラで結界を造る「注連縄しめなわ」に代表されるような「結び」、「信仰の包み」である。奈良平城京は、年貢として物産品が集められ、その輸送用として保護・貯蔵・運搬用に箱、びん、籠、袋などが、かなり完成度の高い包みとして使用されていた。

平安時代では、公家や武家の有職故実として茶道や華道の隆盛とともに茶菓子への包みの美が

「造形の包み」として育まれ、わが国独特の文化が造られた。箱ものには、皮張り、竹編み皮籠かわご、葛籠ひつ、櫃きゅうが用いられ、袋ものは、上刺袋うわさし、頭に載せて歩く戴袋いただきが庶民の間で使われた。稲舂運搬用の俵はすでに完成され、液体の貯蔵と運搬には木片と竹の箍たがで作った桶、木皮で縫ったまげものが用いられた。

江戸時代になると商業が発達し、大消費地の都市へ販路が広がり、商品の輸送にはしつかりした包みが要求されるようになった。陸路や海路も盛んになり、「大形輸送包み」はコンテナへと発展する。また、商品には産地や商品名のブランド表示が求められる、情報伝達機能が求められた。江戸商人文化は「業務の包み」として清酒、醬油に樽、穀類や塩かますに吠、俵、麻袋が発達し、オランダや唐との交易には俵・樽・桶・櫃が使用された。庶民

生活には、軽く運びやすい樽、火桶、水桶の木製容器が広く浸透した。

ところで、風呂敷文化は奈良時代に蒸し風呂の敷物として考案・使用された、わが国独特のものである。「包む」目的で使われたのは江戸文化からで、日本人の手先の器用さと、中身の大きさや形にとらわれず包める機能が受けたのが相まって必需品として定着した。上方商人が江戸進出を狙って商標を染めた風呂敷で東海道を下り、街道の人々から評判になったという話は有名で、現代の販売推進機能にも通じる。

(4) 文明開化から始まった包装

ナポレオンが軍需用に作ったといわれる缶詰（実はびん詰）は、加熱滅菌され飛躍的に保存性が向上した。わが国の缶詰やびん詰は明治維新と

ともに始まった。1871（明治4）年に初めて缶詰が製造され、77年には北海道の5工場で半自動製缶機を用いた缶生産が始まり、その後日清・日露戦争で急速に需要が高まった。

一方、びんについては、1873年に品川硝子製作所で手吹きびんが生産されたが、ビール、洋酒の需要が高まるとびんが不足し、1916（大正5）年に自動製びん機が導入されて生産が上がった。清酒は、酒屋店頭に持参した手桶や徳利で量り売りしていたが、1900（明治33）年頃に1合、2合、4合、1升のびん詰が発売された。24年に自動製びん機で一升びんが量産され普及が進んだ。

パッケージにもっともよく使用されている紙については、1911（明治44）年に日本紙器製造所で化粧品や医薬品の美術印刷紙器が製造された。それよりも早い1909年にレンゴーは段

ボールの製造を始めている。1924年には小島印刷会社がブリキ印刷を始め、26（昭和元）年には光進社がセロハンの製造を開始した。

この時代の商品は量り売り、ばら売りが大半を占めていたが、少しずつファミリーユースの時代に入り、大形容器で購入することが多くなった。1913（大正2）年に森永製菓がキャラメルをばら売りを基本に80粒を缶に入れて販売していたが、翌14年に紙サック函が開発された。これにより20粒と10粒入りが個人用に発売され、いよいよ個装の時代に入った。

明治・大正時代は、ガラス、紙、金属缶などの生産設備が導入され製品化されたが、品質はあまり良いとはいえなかった。流通も対面販売の地域限定販売に限られ、包装も多くは人手による包装作業がなされていた。

(5) 流通革命がもたらしたパッケージ革命

1953（昭和28）年、紀ノ国屋開店からセルフサービス時代の流通革命が始まり、57年ダイエー、1971年にはイトーヨーカ堂、ジャスコ（イオン）が参入して大型小売量販店へと発展する。アメリカから導入されたこのスーパーマーケット形式は大量仕入れ、大量販売、セルフサービス販売が特徴で、これまでの対面販売と異なり、パッケージが商品の顔となった。生活者はパッケージを見て判断し購買することになり、パッケージの役割が重要視され、以下のように新たな機能が求められるようになった。

- ・ 大量のプレパッケージ、すなわち、ばら売りから個包装へ切り替わるので、きれいに見える透明な事前包装（ストレッチパックなど）
- ・ 大量包装するための包装機械適性（ヒート

シール性など）

- ・ セルフサービスのために必要な販売促進性（印刷効果、情報伝達など）

この流通革命と前後して近代科学の発展は、あらゆる産業に大きな影響を与えたが、そのなかでも石油化学、プラスチックの出現は、従来からの包装の思想を根本からくつがえすコペルニクスの転回の革新をもたらした。プラスチックは、既存の木、金属、紙、ガラスなどの包装素材との共存で、近代化への転換を図りつつ急速な発展を上げてきた。

1951（昭和26）年にポリエチレン（PE）が輸入されてPE袋が現れ、55年になるとPEが国産された。59年にはポリエチレンテレフタレート（PET）フィルムとポリスチレン（PS）とが、60年からはポリプロピレン（PP）が国産化され